

2018年4月16日

明治の世相(17)－樋口一葉の遺伝子－

【プロローグ】

・都内の地下鉄日比谷線三ノ輪駅を下車し、数分の所に「浄閑寺」がある。通称投げ込み寺と呼ばれている。不幸にも亡くなった遊女のために境内には慰霊碑があり、「生きては苦界、死んだら浄閑寺」と記している。浄閑寺近くには一葉が住んだ東京市下谷区下谷龍泉寺町(現:台東区竜泉)(明治26年7月20日～明治27年5月1日/21歳)があり、隣は吉原、夕方には一葉の家の前を多くの吉原通いの酔客や住民が仕事に出かけている。一葉は「たけくらべ」の冒頭、「回れば大門の見返り柳いと長いけれど、お齒ぐろどぶに燈火うつる三階の騒ぎも手にとるごとく・・・。」と書いている。この住環境は一葉の作品の糧となり、起爆剤となった。その所産として、『たけくらべ』が生まれた。



・一葉が亡くなってから122年歳月が流れた。一葉は24歳8カ月の短い生涯の間に22の短編と40数冊に及ぶ日記と4000首をこえる和歌の詠草を残した。時には明治の最上層(萩の舎)と明治の最下層(下谷龍泉寺町)をみた。塩田良平氏は「一葉への哀惜」の中で、「彼女と同じように若死にした閨秀もないではないが、その意味では、不幸であった彼女の一生に比して、彼女ほど死後恵まれた作家はなかった」と思う。塩田氏は、一葉に培われた封建的精神と明治時代の持つ自由の精神とが、彼女の中のように格闘して作品化していったかを眺めて、かぎりない興味を覚える。一葉が外部的なものをはね返して、次第に自分の内部のものに生きようとし出した時には、もう天寿の限界に迫っていた。私は一葉伝をかきながら、彼女のあわれさを感じ、明治の女性の運命を感じたのである(注1)。

【プロフィール】

・樋口一葉(明治5年3月25日(1872年5月2日)～明治29年11月23日(1896年11月23日))、名は奈津、夏子とも自署した。明治5年3月25日。東京府第二大区小一区内幸町一丁目一番屋敷、東京府構内長屋にて生まれる(現日比谷シティ)。東京府庁に勤務する樋口則義と母とたきの次女に生まれる。明治20年長兄泉太郎、明治22年父が相次いで亡くなり、次兄虎之助は家を出たため、一葉は、女相続戸主として母たきに仕え、妹くにを守り、女3人で転々と住まいを変えた。身長5尺足らず、髪は薄く、美人でないが、眼に輝きがあった。きわめて小食、近眼、肩懲りで、灸や揉療治に通った。洗濯、縫い物などの手内職、芝居へ行く余裕はなかったが、時には寄席、寺社にお参りするなど町を散策した。

(参考)一葉の生まれた明治5年は、「学制発布」と「全国徴兵制」が制定された。

・一葉宅を、馬場狐蝶と頻りに訪れた平田秃木の「吉田兼好」を一葉は評価してい

た。平田禿木は一葉について、「容姿に於いては、一言にして云えば紫式部ではなくて、清少納言に近いのであった。我々仲間ではブロンテ、ブロンテとよく女史を呼んでいたが、全くその通りであって、決して綺麗な人ではなかったのだ。色朝黒く、髪は薄く少し赤味がかかっていて、それをぎゅっとひつつめに結って、盛装などとても似合う柄ではない」(「日本文学研究資料叢書」より)。

・三宅花圃女史は、小さやかなる身に、正しき鼻筋、玉子なりの顔かたち、平の少し薄きが、難といへばいふなもの、あまり目だ、ぬ奥ゆかしさも、かゝる所にはほのめきて見えし(「真筆版たけくらべ」「一葉女史を憶う」より)(注2)。一葉が死ぬまで忘れられなかった半井桃水は、一葉について、「どちらかと言えば低い身であるのに少し背をかかめ、色艶の好くない顔に出来るだけの愛嬌を作って、静粛に進み入り、三指で畏まつてろくろく顔も上げず、昔の御殿女中がお使者に来たやうなあり様」(「一葉女史」)。

【萩の舎へ】

・一葉が中島歌子の歌塾「萩の舎」へ入門したのは明治19年8月20日、彼女が15歳の時である。明治16年、11歳の時、青梅学校高等科第4級を首席で卒業したが、母は、女は学問より手仕事を習得することが大切であるとの意見から上級への進学を断念する。一葉の「どうしても勉強したい」という熱意に、父が選んでくれた道が歌塾「萩の舎」(現文京区春日1丁目)であった。この入門は一葉の人生に大きな転機となった。歌子の稽古は鍋島家、前田家、松平家などの高貴な華族の子女は出稽古で行い、一般の稽古は塾で行った。一時はその数千人を越すと言われていた。父則義の知人、奥医師の遠田澄庵の紹介だった。

・「萩の舎」の教場は12畳ほどで、時には中島歌子の代稽古を務めている。表には、人力車を待たせた名門の令嬢達が紫の矢筈や黄八丈、お召しや糸織など当時としては立派な見なりで、色とりどりの座布団に座っている。その前で一葉は源氏物語や枕草子の講義をした。一葉は少しも物のおじしない意気颯爽たる少女夏子の面影が残っていた。反面、姉弟子達から見れば生意気な娘だということになり、いじめられる原因ともなった。後世の研究家は「萩の舎」を“明治の宮廷サロン”と称した。

・塾主中島歌子(弘化元年～明治36年)は水戸藩主林忠左衛門の妻となったが、林は水戸天狗党に加わってことで自害した。一葉は、「水戸の人は、大体酒好きな人が多いようだ。中島歌子先生のご主人林忠左衛門氏はいつも晩酌しますで、三杯ほど飲まれるとか、それはまだ普通で、お友達が見えると1斗の酒を飲まれるとか、或る時、山岡鉄舟氏と1斗の酒を飲まれたあと、高下駄で箱根の山に登られたこともあったとか、歌子先生は主人の酔った顔を見たことがない」と話しておられた(注3)。

【生活圏】

・一葉は終生都合14回転居している。幼少期と18歳から、人生の重要な10年強は本郷で過ごしている。成長期の8年半を下谷に、神田に1年半ばかり、芝の兄の家に1年半、そして、「たけくらべ」の舞台となった下谷区龍泉寺町にはわずか9ヵ月、生活の

困窮とともに転居の期間が短くなり、落ち着かない日々を過ごしている。森まゆみ氏はその足跡を地図に展開すると、江戸城を中心に半径数キロに収まってしまうと分析している(注4)。“一葉の生活圏”であったといえる。時には東京図書館(通称上野図書館)へ、時には神田多町(たちょう)へ仕入れに出かけた。

【行 楽】

・「一葉日記」を見ると、一葉の心身は苛まれる日々を過ごしてきたことがうかがえる。そこにはゆとりなどあろう筈がなかった。一葉の人生はほとんど東京から出ていない。但し、明治25年9月26日、萩の舎師中島歌子のお伴で埼玉の大宮公園に行ったことがある。当日、「明治26年9月26日。晴天、早朝師君もとを訪ふ。大宮公園に秋草を見むと誘われ直ちに上野発11時の汽車にていく。3時の車にて帰る」。同様に森鷗外の「青年」にも見られるように、当時、上野駅から汽車に乗っての日帰りの行楽地であった。明治25年5月22日、「今朝は大変よく晴れた。小金井行はとても嬉しいけれど、「武蔵野のメ切日も近いし、のんびりする暇などないのでやめにする。午後、洗濯を少しする」と、小金井行を断念している。

・一葉は時には友人と花見に出かけている一途中、車坂を下ると、「この付近は父上がいつも花の頃は、私たちをつれて朝夕よく来られた所でしたね」と、ふと妹が話すので聞いて、あの頃の春の景色が思い出されて、「山桜ことしもにほふ花かげに散りてかへらぬ君をこそ思へ」と妹二人で涙を流したことでした。上野から隅田川まで行き、車(人力車)は枕橋で返しました。秋葉神社、白髭神社を過ぎ梅若塚あたりでまで花を訪ねました。帰りに長命寺の桜餅を買い妹に渡す。これを母上への土産、三囲神社(みめぐり/向島)のところで妹と別れる。友人の吉田かとり子さんの家を訪れる。家から大学のボートレースを遠見鏡(双眼鏡)で見ながら応援する。そうこうするうちに中島歌子先生も他の友達もみな見えた(注5)。

【安らぎ】

・明治24年4月4日(20歳)、晴。午前中は読書をし、午後は書きものをする。夕暮れから邦子と摩利支天(日蓮宗・徳大寺/下谷区上野御徒町)にお参りする。帰りには杉山物産陳列場を見物する。どの店もお客は一人もいなくひっそりしていたのに驚く。18日、朝から晴れ。久しぶりに珍しくよい天気なので、母上は茄子苗の青々したのをもらって来て、植えたりなされる。同19日、今日も朝早く庭の梅の実を落とす。味噌こし苳に一杯もあった。虫食いもあるので、まともなのはそれより少ないだろう。親子共々静かな時間を過ごした。

【情報収集】

(図書館)

・一葉の最終学歴は小学高等科第4級である。当時の小学校の女子の就学率は、一葉が入学した明治11年24%、退学した明治16年は34%であったので、女子としては必ずしも低い学歴ではなかった(注6)。一葉は幅広く本を読んでいた。とくに古典の教

養は現代人の追従を許されないもので、晩年、安井てつ(後の東京女子大学学長)などに『源氏物語』を講義するほどであった(注7)。

・日本の最初の公共図書館である「東京図書館」で、多くのジャンヌの本を読んでいた。閲覧は有料で1回2銭であった。森まゆみ氏によると、日記の初出は明治24年6月10日、「朝より空くもる。2時頃より田中みの子さんと共に図書館に行く。6時、帰宅する」。図書館は上野忍ヶ岡の西の隅(現東京芸術大学の裏)にあった。とくに図書館への利用回数が多くなったのは、竜泉寺町時代で、「にごりえ」などの多くの小説を書く起点となった。

・図書館は、例によって狭い所へ入れられるので、さぞ暑さも耐えがたかろうかと思っていたが、天井が高く、窓が大きいためでしょうか、吹き入る風が肌寒いほどなのも嬉しい思いでした。いつきても男子は非常に多いが、女子の閲覧者は殆どいないのは不思議な気がする。書名を書き、分類番号などを調べて、請求票を持って行くと、「間違っています。もう一度書き直して下さい」などと言われるので、顔は熱くなり体も震えるほどでした。丁度、弁護士試験が近づいているので、法律書を調べている人が多かった(注8)。

(参考):一葉が上野図書館から借りた図書などー春雨物語/丈山夜譚/哲学会雑誌/奇々物語/くせ物語/昔々物語/各国漫遊記/雨中間答/乗合ばなし/宇治拾遺物語、西行撰集鈔(伊東夏子から借用)/艶道通鑑という5冊の本(田中みの子から借用)/春雨物語/丈山夜譚/哲学会雑誌/奇々物語/くせ物C語/昔々物語/各国漫遊記/雨中間答/乗合ばなし/本朝文粹(もんずい)/雨夜のとし火/五雑俎/早稲田文学の中の江戸文学、シルレル伝記、マクベス詳報、俳諧論/蜘蛛の糸巻、雑誌(萩野氏から借用)。

(新聞購読)

・「一葉日記」を見ると、一葉の知識欲の旺盛さは比類なきものがあつたと言える。現代風に言えば、情報の“ツール”の一つが新聞である。一葉は新聞を読むようになったのは半井桃水(元新聞記者・小説家/一葉の思い寄せた人)などの影響から新聞と言うメディアに特別な関心を持っていた。この時期なのも偶然ではないようである。転居直前に購読紙を「国会新聞」から「東京朝日新聞」に替えたのは、下谷に移ってから持続的に桃水の小説を読みたい、という意識の表れであつた。この頃の日記には、新聞記事に触発された“激しい憂国の情”がしばしば吐露されている。それはたとえ下谷で小商人の生活をしようとも、新聞というメディアを持続的に購読することによって、何とか自己の立脚点を見失うまいとした心境の表れではないかと思われる(注9)。

【半井桃水】

・一葉は「萩の舎」の先輩であつた田辺花圃(後に三宅雪嶺と結婚)が『藪の鶯』で稿料33円20銭を得たことを知り、小説家になること決心する。当時、朝日新聞記者であり、小説家であつた半井桃水を師として桃水の指導を仰ごうと妹邦子の友人である東

京府高等女学校の生徒、野々宮菊子の紹介で半井桃水に入門した。『闇桜』以下3篇を発表するが、桃水との関係を醜聞視されて交際を断念する。一葉が終生忘れなかつた人、桃水は大正15年に67歳で亡くなっている。しかし、一葉のことについては生前、ほとんど語られなかった。一葉の片思いのようで、一葉が可哀そうになる。故に日記は願望の表現だったのか。桃水は日記の出たあとの講演会で、「一葉女史を最もよく知ったつもりの私は一葉女史を少しも見る目がなかったと知って愧じ(はじ)ている」と述べている(注10)。

【一葉の視点】

・「一葉日記」を見ると、一葉は内外の政治情勢に貪欲なほど興味を持っていた。一葉が生きていた時代は、「文明開化」・「富国強兵」・「殖産興業」・「忠君愛国」などのスタートアップ期であった。一葉が20歳(明治24年)の時には、国力が次第に強化され、その延長線上に「日清戦争」があった。一葉は朝刊が宅配されると内外情勢に釘付けになった。以下、一葉が読んだ記事を見ることにする。

(国内情勢)

・来日中のロシア皇太子ニコライ2世が大津市で暴漢に襲われる/蜂須賀茂詔貴族院議長、富田鉄之助氏が東京府知事就任(号外)/大津事件の被告津田三蔵肺炎で、空知監獄で死亡/明治天皇誕生日/美濃大地震/新聞の国会議事録を見る樺山資紀海軍大臣の軍備増額問題/品川弥二郎氏の内務大臣の職を副島種臣に譲る/鍋島侯爵邸に天皇のお出まし/伊東博文公の総理大臣就任 /福島少佐のシベリア横断/伊東書記官の権勢や伊東総理の醜聞/西郷従道入閣し海軍大臣となる/郡司大尉らの千島探検の船隊が隅田川を出発/朝鮮の東学党はますます勢力を増強/侠客清水次郎長死去/北里柴三郎、青山胤通医学博士がペスト菌調査のため香港へ。

(日清戦争)

・日清戦争は明治27年(1894~1895年)に日本と清国が朝鮮の支配権を争ったのが主因。27年5月に朝鮮で甲午農民戦争(東学党の乱)が起きると、6月、朝鮮政府は鎮圧のために、清国と、次いで日本に援兵を依頼。6月12日、日本軍仁川に上陸、7月23日、ソウルの王宮を占領、親日派の大院君政権をつくった。6月25日、日本連合艦隊は豊島西南沖で清国軍艦と遭遇、双方が砲火を浴びせ、戦争が始まる。その結末は日本が勝利し、日清の間で下関条約を締結する。

・日本は一中国から朝鮮の独立の承認、遼東半島、台湾、澎湖列島の割譲、賠償金2億両の獲得、欧米並みの通商条約の締結、威海衛保障占領などを取り付けた。条約調印後6日目の明治28年4月23日、ロシア、ドイツ、フランスからの「三国干渉」を受け、5月4日、日本政府は、遼東半島放棄を決定、還付の代償として清国より庫平銀3000万両を得た。日清戦争の勝利で日本は欧米資本主義列強と並んだ。この戦争により、戦死1132人、戦傷死285人、病死11894人、戦傷病3794人という多くの人的損害を出した。

- ・一葉は当時23歳、一葉日記を見ると、日清戦争については、一葉自身の意見を開陳している。森あゆみ氏による一葉の言動は以下のとおり(注11)。
- ・明治27年6月、「この頃の事すべて書尽くしがたし。朝鮮東学党の騒動。我国よりの出兵。清国との争端。これは女子の得よくしるべき事にもあらず」と気をもんでいる。
- ・明治27年6月23日、大院君を立て、朝鮮に親日政府を作らせた日本政府は、同25日、清国艦隊を宣戦なしに撃破、日清戦争が始まった。このとき、一葉より10歳年上の森鷗外は軍医として従軍した。
- ・しかし、なぜか日記には戦況の記述はなく、このころ一葉に国文学の教えを受けていた高等中学受験生穴沢清次郎は、5歳年上の一葉が「われわれ仲間では、少しも戦争なんて影響されませんね」といい、毅然としていたと証言している(「一葉さん」)。明治28年4月16日、久しぶりに「水の上日記」の再開。「よ(夜)に入て、号外来る。平和談判とへのへり」。どきんとするのは「新領地」と題する次の歌がある。
一敷島のやまとますらをにえ(贅)にして いくらかえたるものこしの原一
- ・これは日清戦争によって領土とした台湾、澎湖島と、のちに三国干渉によって返還した遼東半島を指す。一将功成って万骨枯れる。死者一万三千人余名。同胞の血をかくも流して、少しばかりの領土を得たところで……。たしかな目がうかがえる異色の一首である。

【一葉の死】

- ・森まゆみ氏によると(注12)、一葉日記は明治29年7月22日、斎藤緑雨は訪れた日で終わっています。同月の13日、一葉は築地本願寺の父や兄の眠る墓に最後の墓参をする。同9月9日、無理をして萩の舎に歌会に出席する。緑雨は鷗外に頼み、その知人の名医青山胤道に往診を依頼する。余命いくばくもないとの診断。11月初旬、馬場孤蝶は訪ねると、一葉は「その時分には私は何に為って居ましょう。石にでもなつて居ましょう」といっている。毎日のように見舞いに行ったのは伊東夏子、一葉は気がしっかりしていて、がまんよく、「これがおもしろい」と菓子を手で割ってくれた。23日午前、妹くんに「枕の向きを変えてくれ」といって、向きを変えると、一葉はこと切れていた。24日、川上眉山、戸川秋骨、斎藤緑雨らで通夜。25日、葬儀。くのが内輪だと考えたため、会葬者10余名でした。森鷗外は騎乗して棺側につくと申し出て、くに断わられています。萩の舎からの会葬者は伊東夏子、田中みの子の二人だけであった。戒名を「智相院釈妙葉信女」。

【エピローグ】

- ・明治29年に『文芸倶楽部』に「たけくらべ」が一括掲載されると、森鷗外や幸田露伴が絶賛した。これを機に馬場孤蝶や島崎藤村など『文学界』同人や斎藤緑雨といった文筆家が一葉の終焉の地である本郷区丸山福山町4番地を訪れるようになり“文学サロン化”した。士族の誇りを胸に、つつましくみえて時には大胆、ときには国を憂えた。
- ・一葉の両親は大菩薩峠の麓、甲斐国山梨郡中萩村重郎原(現山梨県甲州市塩山)

の出身で、父は樋口為之助(則義)で10石取りの中農。母は古屋家の娘多喜(あやめ)である。安政4年4月6日、結婚を反対された二人は駆け落ちし、江戸へ出奔する。父の自伝によれば、生来農業好まず経書に心寄せ、幼少にして同村古刹曹洞宗の慈雲寺(寺子屋)の白巖和尚に書法(達筆)を学び、俊敏の誉れがあったと言われている。

・祖父八左衛門(雅号を南喬・子潜)も同様に見識をもった人で、自分の家を「源嶺館書屋」と呼んでおり、蔵書(出府道中記など)、漢詩や俳諧や狂歌を作って子供に教えていた。一葉は後に『にぎりえ』で、八左衛門の教養や反骨精神を主人公お力の祖父に重ねて描いている。祖父と父のきめ細かい考えと実践の遺伝子は一様に伝わったと推断できる。この点について、中萩村の一葉研究家である益田勝俊氏は一葉について、「純粹の甲州農民の血統、系譜であって、一葉のあの努力精神のかんばりは甲州人氣質であり、負けず嫌いなそれぞれ一本一本が大なり小なりその特異性を名物水晶の晶簇的尖鋭と評価している」(注13)。

・一葉の人生について、瀬戸内寂聴氏は、この世の長命が必ずしも幸福とは、私には思わない。すべてが負に見える彼女の生涯を、彼女はその不滅の光芒を放つ作品、それもわずか、22の短い小説によって勝ちに逆転させてしまった(注14)。塩田良平氏は決して天才の一生ではなかった。ただ、利口で負けず嫌いの女が、せい一杯に努力しながら生き抜いた一生に過ぎないのである。それは結果としては、天才の一生よりも天才的に見えた。と言えるかもしれない(注15)。

(グローバリゼーション研究所)代表 五十嵐正樹

(注)

(1) 塩田良平著「樋口一葉」、吉川弘文館、新装版第3刷発行、平成7年8月20。

(2) 井上ひさし著「樋口一葉に聞く」(日本文学研究会資料叢書)文藝春秋、83頁。

(3) 完全現代語翻訳「樋口一葉日記」1993年11月23日、初版第一刷発行、37頁。

(4) 森まゆみ著「一葉の四季」岩波書店(岩波新書)、2012年6月20日、第7刷発行、5頁。

(5) 完全現代語翻訳「樋口一葉日記」1993年11月23日、初版第一刷発行、12～13頁。

(6) 関 礼子著「樋口一葉」、岩波ジュニア新書469、2006年2月6日、第3刷発行、26頁。

(7) 完全現代語翻訳「樋口一葉日記」1993年11月23日、初版第一刷発行、366頁。

(8) 完全現代語翻訳「樋口一葉日記」1993年11月23日、初版第一刷発行、33頁。

(9) 関 礼子著「樋口一葉」、岩波ジュニア新書469、2006年2月6日、第3刷発行、78頁。

(10) 森まゆみ著「一葉の四季」岩波書店(岩波新書)、2012年6月20日、第7刷発

行、189頁。

(11) 森まゆみ著「一葉の四季」岩波書店(岩波新書)、2012年6月20日、第7刷発行、178頁。

(12) 森まゆみ著「こんにちは一葉さん」NHK 人間講座、2005年12月～2005年1月期。

(13) 益田勝俊著「大菩薩峠の囲炉裏」勝縁荘開設五十年、益田勝俊米寿記念。

(14) 瀬戸内寂聴著「わたしの樋口一葉」1996年11月10日、9頁、第1版第1刷発行。

(15) 塩田良平著「樋口一葉研究」〈増補改訂版〉、昭和43年11月23日、719頁。

(参考)

- ・「樋口一葉・資料目録」台東区立一葉記念館、平成21年12月1日、新版第3刷発行。
- ・ウィキペディア。